

平岡昭利著：『地図で読み解く日本の地域変貌』
海青社、2008年11月刊、333p., 3,048円（税別）

地図が地理学の最も基本的なツールの一つであることは論を待たない。わけても国土基本図として作成された地形図は、国土の領域を網羅し、地形や植生をはじめ土地利用の形態を高い精度で示しており、地図は地理学者の共通言語とも称される所以である。一方で地図のデジタル化が急速に普及し、多種多様な地図が次々と生産される現代では、発信される地図情報も膨大なものとなっているだけでなく、その消費のスタイルも確実に変容しつつある。デジタル地図は、コンビニエンスストアやガソリンスタンドの位置、目的地までの最短経路といった位置情報の迅速な確認に威力を発揮し、時には空いている道路の情報まで提供してくれるが、それぞれのコンビニエンスストアやガソリンスタンドの立地要因を教えるはくれない。GIS技術の進歩は、膨大な地理情報を重ね合わせた地図の作成を容易にしたが、そこに描かれる地図は研究者の問題関心に即したデータが投影された地図であり、個々の要素間の関係は明らかにされても、地域全体の構造を示すものではない。

本書の目的は、「古い地形図と現在の地形図の『時の断面』を比較することにより、我々が住んでいる地域は、どのように変貌してきたのかを視覚的にとらえようとする」（はしがき）ことにある。本書の編纂の意義は、デジタル地図全盛の現代において、国土の詳細な地理情報を時間的にも空間的にも最も系統的・画一的・網羅的に表現された地図としての、国土基本図（5万分の1、2万5千分の1地形図）の読み取りを通して、地図に表象された地域の様態を示すことにある。本書では、地域の様態を地域構造と言い換えることが可能である。地域の全体を理解しようとする地理学にとっ

て、本書はまさに画期的な試みといえる。

小稿では、簡単に本書の内容を紹介するとともに、その意義と利用法について述べたい。本書では、北海道から九州から111か所の地域が選択され、編者を含めた86名の人文地理学者によって執筆されている。まず編者の企画力もさることながら、これほど多数の執筆者を選定し、オーガナイズしたことに讃辞を送りたい。もちろん本書に先立つ類書として、編者自身による『地図で読む百年』シリーズ（古今書院刊）に言及する必要がある。こちらも新旧の地形図を比較し、地域によっては写真と図版を加えて、地域の変化を記述した労作であり、10冊で240を超える地域が取り上げられている。こちらは1997年から2006年まで10年をかけて出されたシリーズであるが、本書では執筆者の変更がなされた地域も多く、また対象地域の新設（例えば富良野や南大東島など）がなされ、新規の本として編纂されている。111の地域は都道府県庁所在地や主要都市のほか、特に変貌の著しい地域が選ばれている。八郎潟干拓地や鹿島臨海工業地域、砺波平野、千里丘陵、与勝諸島（沖縄県）などが該当する。

各地域の記述スタイルは執筆者や場所による個性もみられるが、共通のコンセプトが存在する。基本的には見開きの2ページで1都市・地域の構成をとり、明治期と現代の地形図を比較しながら、地域の変貌を地理学者の視点から記載している。東京と大阪には8ページが割かれ、大正・昭和期を加えた4葉の新旧地形図を用いて、地域の変貌が語られている。札幌・仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡といった都市では同じく6ページと、帯広・八郎潟・千葉・さいたま・姫路・岡山・長崎・熊本などでは4ページが充てられ、対象地域に充当された記述量と新旧地形図の図葉数によって、都市・地域の重要性が看取される。記述内容について東京を例にみてみよう。こ

ここでは「自然的基盤と江戸時代の名残」「明治の都市計画と関東大震災・復興計画」「戦後の復興とオリンピック開催」「バブル期以降の変容」の4つの小見出しのもと、東京の自然的基盤と歴史に基づく土地利用の特徴、明治期以降の都市計画に伴う、東京各地区の変化とそれを支えた交通網の発展、震災復興とオリンピックによる都市改造、バブル期以降の現代の東京の変化、臨海副都心の開発と都心回帰の現象など、東京の地誌が歴史的経緯とともに記載されていることがわかる。

本書の執筆者は人文地理学者であるため、読図そのものに焦点をあてるのではなく、地形図を手掛かりにして、地域の土地利用と景観の変化を読み取ることに主眼が置かれている。一方で執筆者の多くは各都市・地域の専門家であり、豊富な地域情報を知っているがゆえに、地図を離れた情報が盛り込まれているものもみられる。もっとも読者にとって、それは地域の貴重な情報であり、本書は地図の読解を目的にするものではなく、すぐれた地誌書として読まれるべきであろう。本書で試みられた新旧地形図を比較しながら、地域の変貌を明らかにするというスタイルは、先述した編者自身によるシリーズ本に先立って、『日本図誌体系』（山口恵一郎編、朝倉書店）や『地形図に歴史を読む』（藤岡謙二郎編、大明堂）といった名著があり、同様に写真を用いたものとして、『写真で読む地域の変貌』（穂積修一、二宮書店）など、数多くの土地利用や景観の新旧比較から地域を読み取る試みが、地理学の分野において蓄積されて

きた。しかしながら本書の試みを、屋上屋を架すものして批判するならば正鵠を得ない。本書は、現代の視点から、日本の重要な都市・地域のダイナミックな変貌を1冊にまとめた貴重な試みであり、現代日本の地誌書として十分に評価されるべきであろう。地形図上に表われた土地利用の各要素は、別個に独立して存在するのでも任意に存在するのでもない。ある自然条件の下で営まれてきた長い人間の歴史の中で、土地利用は改変されてきたものであり、そこには空間の秩序と地域の構造が見出されるものである。

地形図はこうした人類の営為の歴史を克明に記載した人類の貴重な知的遺産である。ところが喫緊の問題として、国土地理院では、現行の地形図の植生表記などを簡略化し、5万分の1や1万分の1といった編集図の紙媒体での作成を中止する可能性が示唆されている。地形図は地理学者のものではないが、地形図の社会的意義を広範に知らしめるのは地理学者の責務である。本書の意義とともに我々に課せられた責務は大きい。

（松井圭介）

文 献

- 平岡昭利ほか編（1997～2006）：『地図で読む百年 全10冊』古今書院。
 藤岡謙二郎編（1969～73）：『地形図に歴史を読む 第1集～第5集』大明堂。
 穂積修一（2001, 2003）：『写真で読む地域の変貌 東日本編、西日本編』二宮書店。
 山口恵一郎編（1972～80）：『日本図誌体系 全12冊』朝倉書店。